

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	日本に移住した外国人における居住空間に対する認知的枠組みとしての図式とその形成に関する研究
Title(English)	
著者(和文)	川野江里子
Author(English)	Eriko Kawano
出典(和文)	学位:博士(工学), 学位授与機関:東京科学大学, 報告番号:甲第1号, 授与年月日:2024年11月30日, 学位の種別:課程博士, 審査員:那須 聖,奥山 信一,斎尾 直子,野原 佳代子,平賀 あまな,藤田 康仁
Citation(English)	Degree:Doctor (Engineering), Conferring organization: Institute of Science Tokyo, Report number:甲第1号, Conferred date:2024/11/30, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

論文審査の要旨及び審査員

(2000字程度)

報告番号	乙 第 号	学位申請者	川野 江里子	
論文審査員	氏 名	職 名	氏 名	職 名
	主査 那須 聖	教授	平賀 あまな	准教授
	奥山 信一	教授	藤田 康仁	准教授
	齋尾 直子	教授		
	野原 佳代子	教授		

本論文は「日本に移住した外国人における居住空間に対する認知的枠組みとしての図式とその形成に関する研究」と題し、以下の6章から構成されている。

第1章「序論」では、研究の背景として本論で着目する外国移住について、環境移行の観点からは異文化居住経験に伴う変化やその過程を、環境知覚の観点からは経験に基づいた知識が同化と調整の繰り返しにより体制化される認知的な枠組みをそれぞれ述べた上で、住環境を認識する際に用いる認知的枠組みを「居住空間の図式」と呼称し、文化的背景や居住経験がこの「居住空間の図式」の形成に関わっていること、既往の研究ではこの認知的枠組みから異文化居住経験と居住空間の認識について捉え論じられていないことを指摘している。その上で本研究の目的として、日本に移住した外国人の日本の居住空間の認識および「居住空間の図式」の形成過程について明らかにすること、加えて、日本の居住空間の認識を明らかにする過程で抽出される日本の居住空間の特質について日本の居住空間の特異性および他地域との共通性から整理することで、日本の居住空間の認識の中で形成される「居住空間の図式」の構造について明らかにすることを述べている。

第2章「日本文化に触れた文化人・知識人による日本移住後の日本の居住空間の認識 —明治以降日本に移住した外国人による書籍を対象とした文献調査」では、明治以降の日本文化に触れた文化人・知識人による明治から平成に出版された書籍を対象として、日本に移住した外国人の日本の居住空間の認識及びその変化を明らかにすることにより、居住空間の捉えられ方の特徴やその変遷を整理している。そこから、外国人の認識する日本の居住空間の物理的特質と行動的特質やそれに付随する印象や評価を表す項目として、「床座生活にまつわる生活様式および習慣」「居住空間の簡素さ」「自然とのつながりおよび向き合い方」「部屋の広さ・天井高についての認識」「仕切りとその機能性」「快適性にまつわる感覚」「伝統的な建築要素」「都市の様子」「宿泊施設として日本の旅館」を抽出している。時間経過に伴う居住空間の認識や住まい方の変化は「床座生活にまつわる生活様式および習慣」において見られ、身体的対応を伴う適応があることを明らかにしている。

第3章「東京に在住する外国人の日本の居住空間の認識 —東京在住の外国人を対象とした質問紙調査」では、質問紙調査を用いて、外国人の現在の居住空間の認識や住まい方を明らかにすることにより、外国人の日本の居住空間の捉え方を整理した。なかでも、「居住空間の図式」更新について探る第4章に先立ち、図式形成に関わっていると想定される個人の文化的背景、居住経験に相当する居住年数や居住空間の選択基準と日本の居住空間の認識との関わりを検討している。居住期間の長短に抛らず、住居の選択基準として居住空間の雰囲気や印象を基準項目に挙げた群と挙げていない群とでは、居住空間の広さの評価に差異が認められたことを明らかにし、居住空間を認識する際に用いる認知的枠組みによって居住空間を認識するという「居住空間の図式」と符合するプロセスがある可能性を推察している。

第4章「東京に在住する外国人の日本における住まい方の変化の対応と居住空間の認知構造からみる「居住空間の図式」形成の過程 —東京在住の外国人を対象としたインタビュー調査」では、第3章の推察を踏まえ、インタビュー調査を用いて、東京在住の外国人の日本の居住空間と住まい方の認識を明らかにし、日本居住後の居住空間における「住まい方の対応」から「居住空間の図式」の形成を考察している。「住まい方の対応」では、維持、拒絶、適応・新規、適応・代替、妥協、諦観の6種の対応を抽出・分類し、このうち積極

的な住まい方の変化が見られた「適応・新規」「適応・代替」において、「居住空間の図式」が更新されていることを推定し、上位概念との関係から検討している。「適応・新規」「適応・代替」ともに「居住空間の図式」は更新されており、「適応・新規」は日本の居住空間の特質に即した住まい方に接し積極的に受け入れ実践している一方で、「適応・代替」では、自国で価値を置いていた住まい方の本質的な部分を日本の居住空間において代替可能な住まい方の中に見出し、自国での住まい方から上位概念を基軸として日本の居住空間に即した新たな住まい方へと翻訳していることを明らかにしている。

第5章「日本の居住空間の認識における「居住空間の図式」形成の過程 一文献調査と質問紙・インタビュー調査との対照」では、第2章の文献調査で得た明治以降現代に至るまでの外国人のみた日本の居住空間の認識と住まい方さらにはその変化と、第3章の質問紙調査および第4章のインタビュー調査で得た現在の東京に居住する外国人の捉えたそれらとを対照し、日本の居住空間の特質と「住まい方の対応」との関わりを整理している。その上で日本の居住空間の他地域との共通性と特異性を明らかにし、さらには日本の居住空間の認識における「居住空間の図式」形成の過程について、特異性のある日本の居住空間の特質について、その特質の価値の評価によって更新の有無が異なることを明らかにしている。

第6章「結論」では、各章で得られた知見を総括し、本論文の結論をまとめている。

以上を要するに本論文は、外国人が特定の環境の中での居住で獲得する認知的枠組みとしての「居住空間の図式」について、その構造と形成の過程を日本の居住空間の特質と照らし合わせて解明したものである。その成果は人間の認知的枠組みの解明に関する学術的な意義を有するにとどまらず、異文化居住経験をはじめ、災害時の拠点移動や高齢者施設への移動など顕著な変化を伴う環境移行において居住者自らの関与による適応を可能とする実践的な課題への示唆に富む研究であり、人間環境学、建築学および工学的な貢献が大きく、博士（工学）の学位論文として十分な価値があるものと認められる。

注意：「論文審査の要旨及び審査員」は、東工大リサーチリポジトリ（T2R2）にてインターネット公表されますので、公表可能な範囲の内容で作成してください。